

<全体分析>

試験時間 120 分

解答形式
記述式

分量・難易 (前年比較)

分量 (減少・やや減少・変化なし・**やや増加**・増加)
難易 (易化・やや易化・変化なし・**やや難化**・難化)

出題の特徴

読解総合：英文和訳，内容説明，空所補充，本文の内容に絡んだ自由英作文
英作文：和文英訳

その他トピックス (入試改革の方向性を踏まえた目新しい出題など)

読解問題においては，昨年度に続いて空所補充問題が出題されるとともに，内容説明問題が出題された。大問Ⅰの空所補充問題は動詞を語形変化させて入れる問題になっている。大問Ⅱの中に本文のテーマに絡んだ自由英作文 (100 語程度という指定) が出題され，大問Ⅱの配点が 75 点となっている。代わりに前年度までであった大問Ⅳがなくなっている。大問Ⅲは空欄がなくなり，2017 年度まで出題されていた和文英訳に戻っている。

<大問分析>

番号	区分	出題分野・テーマ	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	読解総合	「仮想現実と現実」 (575 words)	(1) That の内容を明示することが「説明」に相当し，それ以外はほぼ和訳に準じている。That は具体的には直前の every component of virtual reality... の内容を指している。 (2) 直前の If you look at another person,... の一文の内容をまとめればよい。 (3) 第 1 文の a scientific community は「科学者の集まり」のこと。constantly testing 以下は分詞構文。第 2 文は convince O to do 「O を説き伏せて…させる」の形が用いられている。第 3 文の to treat... は enough を修飾。on which to base expectations は on which expectations should be based とほぼ同義。 (4) 比較的平易だが，(イ)(エ)では語形変化に気をつけたい。 出典：Jaron Lanier, <i>Dawn of the New Everything: Encounters with Reality and Virtual Reality</i>	やや難

II	読解総合 ・英作文	「カメラ付携帯電話がもたらした変化」 (581 words)	<p>(1) やや易しめの下線部和訳問題。follow「後に続く」、go as far as <i>doing</i>「…しさえする」、declare O C「OがCだと断言する」といった語句が正確に訳出できるかが問われているが、ここはきっちりと得点したい。</p> <p>(2) 具体化を含めた下線部和訳問題。thisの具体化は比較的単純だが、下線部内にある <i>attributed</i> の正確な意味の把握と、下線部が言及する「変化」の具体化は簡単ではない。attribute A to Bはここでは「A(性質など)がBにあると考える」の意味なので、下線部全体は「このことによって、個々の写真を取っておくことと捨ててしまうことにあると私たちが考えていた情緒的な意味合いが変わった」という意味となる。したがって、下線部に続く部分からこの「変化」の内容を具体的に補うことになるが、「かつては最愛の人の写真は保存されるものだった」という変化する前の状況の説明と、「大量に撮影されるデジタル画像の時代では、写真撮影に伴う諸々の作業を好んでやるようになった」という変化した後の状況の説明を盛り込む必要がある。</p> <p>(3) 標準的な難易度の下線部和訳問題。第1文では Yet が「さらに」の意味であること、it が形式主語ではなく「カメラ付き携帯電話」を指す代名詞であること、travelers ... families と hobbyists ... others の並列に注意が必要。それ以外には、nice ; art のこの文脈に適切な訳語の選択のほか、keep in touch with A の知識が求められている。第2文では wait for A to do「Aが…するのを待つ」といった表現のほかは標準的な語い力が問われているが、“..., so they can ...”が「彼らが…できるように…」という〈目的〉の意味であり、who から始まる関係代名詞節内に含まれていることに注意。第3文はカメラ付き携帯電話やスマートフォンの機能や構造になじみがあれば文意は見通しやすかっただろう。on the front は「前面に」の意味だが、携帯電話の構造とカメラの付く位置を考慮すると「画面側に」とするとよい。video calls は「ビデオ通話」の意味。このほかには allow for A ; happen in practice ; not ... until ~の訳出がポイントとなるが、allow for A「Aを考慮に入れる」はやや難度が高い。</p> <p>(4) 新形式の出題。見た目は長文読解と融合した形式の自由英作文だが、ほぼ長文の内容とは独立した設問になっているので、three social uses の内容を正確に読み取ったうえで、その「1つを選び」「具体例を挙げ」という要件を見落とさずに指定の語数を書ききればよい。むしろ、形式の変化に慌てず、落ち着いて対処できたかどうかポイントであっただろう。</p> <p>出典 : Katrin Tiidenberg, <i>Selfies: Why We Love (and Hate) Them</i></p>	やや難
----	--------------	-----------------------------------	--	-----

Ⅲ	英作文	「マイノリティとは」	京都大学の和文英訳の問題としては、長めの問題。第2文の「概念を数だけの問題に還元する」や第4文の「数としては少なくない集団」の部分は日本文の意味をしっかりと理解した上での英訳が求められる。「人種あるいは宗教のような属性によって定義づけられる集団」や「組織の管理職のほとんどが男性である」のあたりは直訳も可能だが、内容をくみ取った意識も可能で、京都大学らしい出題となっている。	標準
---	-----	------------	---	----

注：区分は「英文解釈」「読解総合」「英作文」「文法・語法」「聞き取り」「その他」

難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

読解問題では和訳以外に内容説明問題が出題された。解答箇所に迷うようなことはあまりないと思われるが、どこまでを解答に盛り込むか、そして該当箇所をどこまで正確に読むことができたかが問われる。大問Ⅰの空所補充は、前年度に続き今年度も動詞を入れるもので難度は比較的穏当だったが、語形変化を伴うものだったので時制等に注意する必要がある。今後もこの点の注意が必要。文脈からの推測力が問われることには変わらない。英文のテイスト自体は、2題とも基本的に従来の英文読解問題のそれと大きくは変わっていないが、今年度は2題とも比較的現代的なテーマが選ばれた。とは言えこの傾向が続くかどうかはわからない。従来の精読問題の勉強法を大きく変える必要はなく、過去問に目を通すことにも十分意義はある。精読に加えて和訳以外の記述、特に「まとめる」演習を今後とも心がけたい。

英作文では大問Ⅲは2017年度以前の英訳問題に戻った。過去問の英訳問題の練習を含め、各人の実力に合わせて演習を積む必要がある。大問Ⅱに今年度から導入された自由英作文問題は、すでに多くの大学で出題されているものである。自分を書ける範囲の平易な英語で確実に書くことを心がけたい。他大学の過去問などを参照し、積極的に添削指導を受けることが望ましい。なお、自由英作文はさらに形式が変わる可能性も十分にあるので、形式にこだわらず、さまざまな形式の問題に触れて、実際に答案を作る演習をすることをすすめる。